



日本産タマムシ科解説 (4)

黒沢良彦

B. Tribe Chalcophorini ウバタマムシ族

全世界の熱帯および温帯に分布し、中型大型の種類を含み、約50属に分けられるが、日本にはその中の4属だけを産する。この他に、台湾とミクロネシアに産する2属を加えた6属の検索表は次の通りである。

1. — 前胸背板は中央に明らかな縦溝を走らす……2.
- 前胸背板は中央に縦隆線を走らす……5.
2. — 腹部腹板第1節は強く隆起し、その中央は後方に強く突出するかまたは平板状……2. *Cyphogastra* H. Deyrolle, 1864
- 腹部腹板第1節は全く突出しなく平板状にもならない……3
3. — 前胸背板の側縁は狭く、且つ明瞭に反り上る……4. *Tamamushia* Miwa et Chûjô, 1935
- 前胸背板の側縁は全く反り上らない……4.
4. — 前胸腹板突起は平滑かまたは極く僅かに圧下される……3. *Iridotaenia* H. Deyrolle, 1864
- 前胸腹板突起は中央に縦溝がある……
6. *Nipponobuprestis* Obenberger, 1942
5. — 前胸背板は中央に1縦隆線を走らせ、前胸腹板突起は平坦かあるいは一様な縦溝がある……
5. *Chrysodema* Castelnau et Gory, 1835
- 前胸背板は多少共明瞭な5条の縦隆線を走らせ、前胸腹板突起は縦溝あり、その中央に多少共明瞭な縦隆線を有する……7. *Chalcophora* Solier, 1833

2. Genus *Cyphogastra* H. Deyrolle, 1864  
ナンヨウタマムシ属

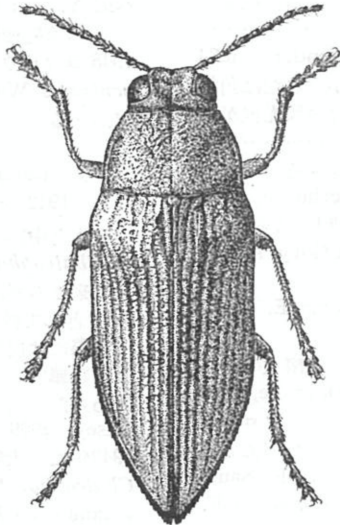
ニューギニアを中心とした地域に多くの種類を産し、モルッカ諸島、オーストラリア、タヒチ島、ニューヘブリデス諸島、マリアナ諸島などにも少数の種類を産する。純然たるメラネシア系の属で、アジアの他地域には全く産しないばかりか、近縁の属すらない。日本付近ではマリアナ諸島に次の2種2亜種が知られているだけである。

1. *C. auripennis* E. Saunders, 1867 ツマベニナンヨウタマムシ  
グアム島の原産であるが、他の島のものは別亜種で、subsp. *longueti* Théry, 1926 (サイパン島), subsp. *latro* Kerremans, 1909 (ロタ島) などの一見全く別種と見える程に色彩の異なる亜種がある。マリアナ諸島の中では最も北に位置するバガン島にも別亜種がいるが、未だ命名されていない。

2. *C. tinianica* Y. Kurosawa, 1953 テニヤンナンヨウタマムシ  
テニアン島の特産種である。一衣帯水のサイパン島とテニアン島に全く別種がいるのは面白い。

3. Genus *Iridotaenia* H. Deyrolle, 1864 セスジタマムシ属  
インド、ビルマ、インドシナ半島からフィリピン、モルッカ諸島に至る地域に約60種を産する。日本近隣では、台湾南端の紅頭嶼に *I. kotoensis* Miwa et Chûjô, 1940 コウトウセスジタマムシを産するだけである。

4. Genus *Tamamushia* Miwa et Chûjô, 1935 ツマベニタマムシ属  
原記載者の三輪勇四郎、中条道夫両博士はこの属をクロタマムシ亜科 (Buprestinae) に編入したが、触角の構造は明らかにウバタマムシ亜科 (Chalco-



第5図 *Tamamushia virida* Miwa & Chûjô ツマベニタマムシ

phorinae)に属する。ウバタマムシ亜科の中でもセスジタマムシ属とムネスジタマムシ属の中間に位置する属で、ボルネオとインドシナ半島に産する3種類で代表される属 *Cyalithus* Thomson, 1878に最も近い。小笠原諸島特産の唯一の種類 *T. virida* Miwa et Chûjô, 1935 ツマベニタマムシによって代表される。本種は「十和田湖」産の♀と推定される1頭の標本に基いて記載されたものであるが、私は日本本土で採集された標本を見たことがない。私の検した1♂3♀は全部小笠原諸島産であり、小笠原のような暖地と十和田のような寒地にこのような熱帯性の種類が共通して産するとは到底考えられない。恐らく「十和田」という原記載にある産地は誤りであろう。

5. Genus *Chrysodema* Castelnau et Gory, 1835 ムネスジタマムシ属

フィリピンに最も繁栄している属で、ここを中心にマレー諸島、インドシナ半島、セイロン、台湾、日本に小数の種類があり、ニューギニア、オーストラリア北東部、ソロモン諸島、マリアナ諸島、パラオ諸島などにもかなりの種類がある。日本には次の2種を産するが、中国には1種も産しない。

この属は次の3亜属に分けられる。

1. — 翅鞘肩部は外方に歯状に突出する。跗節は黄褐色……………
- a. *Pseudochrysodema* E. Saunders, 1874
- 翅鞘肩部は全く突出しないか、または角張るが、歯状を呈さない。跗節は金属光沢がある……………2.
2. — 前胸背の側隆線は前縁角に達する……………
- …………… b. *Thymedes* Waterhouse, 1905
- 前胸背の側隆線は前縁角に達しない……………
- c. *Chrysodema* Castelnau et Gory, s. str.

a. Subgenus *Pseudochrysodema* E. Saunders, 1874

オーストラリア、ニューギニアその他南太平洋の諸島に分布する属 *Paracupta* H. Deyrolle, 1864に似た、黄褐色の跗節を有する一群で、ミクロネシアに2種、ニューギニア、フィリピンなどに3種を産する。日本近隣では *C. (P.) badeni* E. Saunders, 1874 (ヤップ島)と *C. (P.) schmeltzi* E. Saunders, 1874 (パラオ諸島)の2種がある。

b. Subgenus *Thymedes* Waterhouse, 1905

フィリピンのボホール島産の *C. flavicornis* E. Saunders, 1874 だけ1種を含むだけである。

c. Subgenus *Chrysodema* Castelnau et Gory, s. str.

上記2亜属を除く70余種類を含むが、日本は分布の北端に当り、黒潮に沿った地方に次の2種を産するだけである。

1. *C. lewisii* E. Saunders, 1873 アヤムネスジタマムシ(ルイスタマムシ) 分布: 日本(本州、八丈島、四国、九州、対馬、屋久島、種子島、トカラ諸島、奄美諸島、沖縄諸島、宮古諸島、八重山諸島、与名国島)、台湾。黒潮に沿って南から北に分布を挙げた典型的な種類で、九州南端、宮崎県、高知県、和歌山県などの沿海地方、八丈島、長崎、対馬などと琉球列島の全部に分布し、日本におけるフィリピン系昆虫の代表種と考えられる。幼虫はシイ類、カン類などの衰弱材を食べる。琉球列島産のものの中には翅鞘基部近くに鏡紋の現れるものがあり、これを *ab. nagaokai* Y. Kurosawa, 1954 という。この紋は、この属の多くの種類に現れる基本的な紋であり、次の *Nipponobuprestis* 属にも現れるので、単なる個体変異と見なすことは出来ない。

2. *C. jucunda* Castelnau et Gory, 1835 アオムネスジタマムシ(ムネスジアオタマムシ) 分布: 琉球(奄美諸島以西)、台湾、フィリピン。沖縄と八重山諸島からは以前から知られていたが、最近奄美大島からも記録された。台湾南部ではモモタマナの幹に加害するという。フィリピンにはよく似た種類が多い。本種にもアヤムネスジタマムシと同様の所に鏡紋を現す個体がある。

近隣地方に産するこの属の種類には *C. yasumatsui* Y. Kurosawa, 1954 ヤスマツムネスジタマムシ(台湾紅頭嶼)、*C. berliozii* Descarpentries, 1948 コウトウムネスジタマムシ(台湾紅頭嶼)、*C. ventralis* Waterhouse, 1885 (マリアナ諸島)などがある。

6. Genus *Nipponobuprestis* Obenberger, 1942 マダラタマムシ属

日本と中国に分布し、前の *Chrysodema* 属と次の *Chalcophora* 属の中間に位するものである。

従来この属は属 *Chalcophorella* Kerremans, 1903として扱われて来たがこの *Chalcophorella* 属は実際には所属の曖昧な種類を寄せ集めて創られたような属で、当然幾つかの属に分割されるべき運命にあった。先づ、Caseyは北米産の種を属 *Texania* Casey, 1909に分割したが、Obenbergerは更に1942年に旧大陸の残余の種類を3属に分割し、更に *Chalcophorella* s. str. を3亜属に分けた。Kerremansが *Chalcophorella* 属を創設した時には、模式種の指定はしなかったが、記載は主として日本産の *C. querceti* E. Saunders クロマダラタマムシによるものであり、この属に属するものとして列挙した種類の先頭に *C. amabilis* S. van Vollenhoven, 1864 (当時は *C. amabilis* と *C. querceti* を区別していなかった) を挙げてあるもので、当然 *Chalcophorella* 属は日本産の種類に対して残すべきであったが、Obenbergerは、そうせずに、*Chalcophorella* 属の模式種として、地中海地方から中近東にかけて分布する *C. stigmatica* Schönherr, 1818を指定し、日本産の2種に対しては改めて新属

*Nipponobuprestis* Obenberger, 1942 を創設した。この扱いは、命名規約上有効なので、以後日本産の種類には、この *Nipponobuprestis* を用いなければならなくなった。

日本には次の2種を産する。

1. *N. amabilis* (Snellen van Vollenhoven, 1864) アオマダラタマムシ 分布：日本(本州, 四国, 九州, 対馬)。朝鮮からの記録は再確認を要する。本州では茨城県以西, 裏日本では福井県以西に分布する。幼虫はサクラ, ツゲなどの枯木または衰弱木につく。

2. *N. querceti* (E. Saunders, 1873) クロマダラタマムシ 分布：日本(本州, 四国, 九州), 中国。対馬からの記録は前種の誤りである可能性が強く, 再確認を要する。台湾の記録も別の理由から疑わしい。本州では茨城県と新潟県以西の地方に分布する。幼虫はエノキの衰弱木か枯木を食べる。

#### 7. Genus *Chalcophora* Solier, 1833 ウバタマムシ属

東は日本から琉球, 台湾, 中国南部, インドシナ半島中北部, ビルマ, ヒマラヤ, ペルシャを経て, シリア, 小アジア, ヨーロッパ南部, 北アフリカなどの地中海地方に到り, 更に海を越して北米中南部より中米に到る間に分布する。このように北半球の温帯を帯状に取り巻いて分布する属は, タマムシの中でも最も起源の古いものと考えられ, 他の昆虫の中にも幾つかその例を見ることができる。約25種を含むが, 日本には2種を産する。

なおこの属を *Buprestis* Linné, 1758 として取り扱い, クロタマムシ属を *Ancyllochira* Eschscholtz, 1829 とする学者もあるが, ここでは従来からの扱いに従った。

1. *C. japonica* (Gory, 1840) ウバタマムシ(オバタマムシ) 分布：日本(本州, 四国, 九州, 佐渡, 伊豆諸島, 対馬, 隠岐, 宍岐, 屋久島, 種子島), 朝鮮, 琉球, 台湾, 中国, インドシナ半島。日本本土と朝鮮産は原亜種, 奄美大島より沖縄本島にかけてのものは緑色で点刻の強い亜種 subsp. *oshimana* Nonfried, 1890 アオウバタマムシに分けられる。また, トカラ諸島, 久米島, 八重山諸島, 台湾にそれぞれ未命名の別亜種を産するが, 宮古諸島の標本は見たことがない。中国やインドシナ半島産のものもそれぞれ別亜種である。小笠原諸島と北大東島のものは日本本土のものとは異なる所が全くなく, 本土から松材について輸入されたものと考えられる。幼虫はマツ類の枯材につく。なお, 本種はウバタマムシ族の中では, 小楯板が背面から全く認められない, 唯一の例外的存在であるが, ごく稀に背面に微小な小楯板の現れるものがあり, これを ab. *scutellaris* Théry, 1936 という。

2. *C. yunnana* Fairmaire, 1888 サツマウバタマムシ 分布：日本(本州, 四国, 九州, 対馬, 屋久島, 種子島), 琉球, 台湾, 中国, チベット東

部, インドシナ半島北部。原亜種は中国中南部からチベット, インドシナ半島中北部へかけての地方の産。日本本土産は亜種, subsp. *satsumae* Lewis, 1896 に, 奄美諸島産は subsp. *insularis* Théry, 1908 に, 沖縄諸島と八重山諸島産は subsp. *abnormalis* Miwa et Chûjô, 1935 に属する。台湾産も別亜種である。本州では和歌山県に産することが確認されたが, 佐渡からの記録は流木により流れついたので, 土着しているとは思われない。

なお, 北九州市八幡より記載された *C. zoufali* Obenberger, 1924 ツクシウバタマムシはその記載から推定するとヨーロッパに広く分布する *C. mariana* Linné, 1758 やこれに近似した *alternans* Abeille de Perrin, 1904, *intermedia* Rey, 1890 などに近い種類と思われるが, その後日本でこれに当る種類が採集された例を聞いたこともない。恐らく何かの誤であると信じ, ここでは除外した。

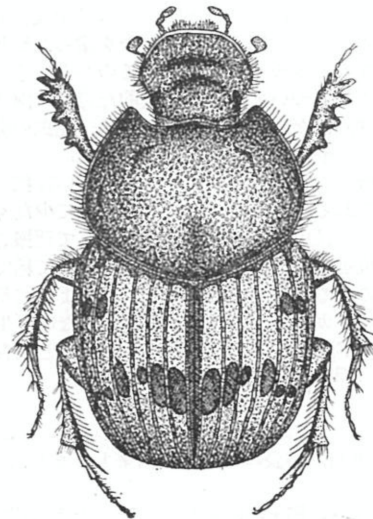
(東京, 国立科学博物館)

#### ○ヤマトエンマコガネ牛尾山に産す

ヤマトエンマコガネ *Onthophagus japonicus* Harold は従来, 奈良, 佐渡, 岩手県八幡平などが産地として知られているが, 私は京都牛尾山で採集したので報告する。

1 ♀, 京都市東山区牛尾山 13. X. 1968.

京都牛尾山は緑色のオオセンチの産地として良く知られたところである。私もこの日はオオセンチを採集に行き, 山頂近くの尾根道に置いてあったゾウの糞より, オオセンチと共にヤマトエンマコガネ一頭を得た。なおゾウの糞は日当たりが良いため相当乾燥しており, 附近の土壌は比較的堅い砂質土壌であった。末筆ながら御教示をいただいた三宅義一氏に



1mm

御礼申し上げます。(奈良市後藤町, 北村 豊)  
○船で焼尻島へ渡ったウリハムシモドキ

1966年8月9日, 筆者は北海道の離島の1つ焼尻島の調査に向うため, 羽幌港で連絡船天羽丸に乗船甲板上で出航を待っていた際(午前7時30分頃), 白いペンキを塗った船室の外壁に, 数匹のウリハムシモドキ *Atrachya menetriesi* (Falderman) が朝日を浴びながら止まっているのを発見した。何気なしに眺めていると, 1匹, また1匹と岸の方から新たな個体が飛来し, 次第に個体数がふえてきた。このハムシの色彩型の分布パターンを調査中だったので, 勞せずして羽幌の材料が得られることを喜びさっそく片端からそのハムシを毒びん中に投入していった(全体で18匹を採集)。しかし捕獲作業半ばにして, もしこの虫をこのままここに残しておいたらどうなるかと, その結果に興味をいだきはじめたので, 5匹(すべて *discrepans* 型)ほどそのまま残し, その成り行きを見守ることにした。(ウリハムシモドキの他に唯1匹ではあったがアイノシギゾウ *Curculio aino* Kôno も飛来した)

やがて8時, 船は予定通り出航, 一路焼尻島に向った。1時間ほどして船は焼尻港に入港。その間5匹のウリハムシモドキは全く動く気配を見せなかったが, 停船して船の壁が陽光を受け, その場の温度がやや上昇しはじめたと思われる頃, 今までじっと壁に静止していたウリハムシモドキの1匹が, いきなり飛びたつたと思うと, 折からの風にあおられてみるみる中に焼尻上空の青空の中に吸い込まれていった。島への着地に成功したかどうかまで確認できなかったが, 飛び去った方向から推して, 恐らく島のどこかに着地できたものと考えられる。(他の4匹の個体は筆者が下船する時も, まだもとの位置に静止していた)。

上に挙げた事実は, 2つの興味ある問題を提供してくれると思う。1つは, 白いペンキを塗った船体に, なぜウリハムシモドキが飛来するのかということである。これについては今後実験的な方法で解決していかなければならない。もう1つは, 昆虫の分布拡散における船の役割という問題である。

船や航空機によって分布が広がる, あるいは広がったと考えられる例は, 昆虫だけでも決して少なくない。しかし, 昆虫が船や航空機に付着して運搬される実際の現場をつぶさに観察した例は極めて稀であり, 筆者の知る限りでは生駒(1955)によって報告されたアキアカネ? の例があるに過ぎない(生駒義博: トンボ隠岐島から本土へ渡る, 採集と飼育17, p. 363, 1955)。

焼尻島では上陸後多数のウリハムシモドキを採集し, その分布を確認することができたが, 今回ここに記録したような北海道本島からの移住がしばしばあるとすれば, 焼尻島における古い調査記録でもない限り, この島のウリハムシモドキは果して在来のものなのか, それとも航路の開設に伴って比較的近年本土からもたらされたものなのか, その判断がつきにくくなってくる。しかし, 今回得た羽幌と焼尻島の資料, それに焼尻島に近接して存在する天売島における資料などを比較することにより, この辺のいきさつをある程度伺い知ることができる。なんとすれば, 第1表に示す如く, 羽幌では *discrepans*

産地	性	型	原 型	<i>discrepans</i>	原型の ♂型	計
羽 幌	♂		3	10		18
	♀		4	2	2	
焼 尻	♂		1	27		47
	♀		0	18	1	
天 売	♂♀		0	140	0	140

第1表 ウリハムシモドキ各型の産地別採集個体数の他に確実に原型の混棲がみられるのに(羽幌の他留萌や大和田においても同じような混棲がみられた), 天売島には原型は全く分布せず, すべて *discrepans* だけとなり, 焼尻島でその中間的混棲率をみることができるからである。つまり, 天売・焼尻の両島には最近まで *discrepans* のみ分布していたが, 航路の開設により, 北海道本島から新たに原型因子をもつ個体の侵入が起りはじめ, 既に焼尻島においてはある程度原型因子の混入が果されていると結論づけることができるのではないかと思う。羽幌からの連絡船は焼尻を経て天売まで行っているのだからやがては天売にも原型の姿がみられるようになるかもしれない。今後継続してこうした推移を見守ることができたら, 集団遺伝学上興味深い事実が得られることであろう。(埼玉県鶴ヶ島町 大野正男)

#### 甲虫談話会

会費(1カ年)500円, 第6号は5月末発行予定, 投稿切は4月15日。

発行人 黒沢良彦

発行所 甲虫談話会 東京都台東区上野公園

国立科学博物館動物研究部内

電(822)0111, 振替東京 60,664

昆虫類在庫品価格表1969年版が出来上りました。日本および台湾の甲虫類各種にわたり掲載されています。

送料共 ¥ 200

外国産甲虫類の御案内は毎月の入荷品を新着標本案内で御案内しております。併せて御利用下さい。

年間通信費 ¥ 360

東京都練馬区石神井局私書函3号 大蔵生物研究所